

研究 報告

調合油乳剤のイチゴ苗浸漬処理における 処理法の違いがナミハダニの防除効果と 作業性に与える影響

福岡県農林業総合試験場 伊丹 いたみ はるい うえむら かなこ しみず のぶたか
春衣・上村 香菜子・清水 信孝

はじめに

イチゴ栽培において主要害虫の一つであるナミハダニ *Tetranychus urticae* Koch は、葉裏に寄生して吸汁加害する。はじめは白い斑点として現れるが、進むと大きな白斑となり、やがて落葉する（梅谷・岡田，2003）。本種は育苗圃から苗を介して本圃に持ち込まれることから、防除体系を構築するうえでは、定植前までに効果的な防除を行い、本種の密度を低減することが重要であると考えられる。しかしながら、本種は薬剤感受性の低下が問題となり（柳田ら，2013；関根・鈴木，2016；山口ら，2020）、防除に苦慮している。そのため、感受性低下のリスクが低いと考えられる気門封鎖型薬剤の積極的な活用が望まれるが、本剤には浸透移行性はなく、薬液が虫体にかからなければ殺虫効果を発揮できない。よって、散布のむらがある場合には、防除効果が不安定となる可能性がある。そこで、イチゴ苗を調合油乳剤（商品名：サフオイル乳剤）に浸漬する処理方法が検討され、高い防除効果が得られることが明らかとなった（上村ら，2019）。翌年には調合油乳剤の「定植前、2～10秒間苗浸漬」として農薬登録が適用拡大した。一方、登録にある「苗浸漬」としては、①苗全体を浸漬する方法（図-1）、②苗の地上部（茎葉部分のみ）を浸漬する方法（図-2）が考えられるが、それぞれの方法が、防除効果や作業性、生育に対してどの程度影響するかは明らかではない。

本稿では、イチゴ苗に寄生するナミハダニに対して、苗浸漬処理の方法の違いによる防除効果、作業性および生育への影響を調査した結果を報告する。なお、本試験は（一社）九州病害虫防除推進協議会の委託試験により



図-1 苗全体を浸漬する方法の例



図-2 苗の地上部（茎葉部分のみ）を浸漬する方法の例

2022年に実施した。併せて感謝の意を表する。

I 苗浸漬処理に加用する展着剤の選定（室内試験）

1 材料および方法

調合油乳剤は、濡れ性の良い展着剤の加用が推奨されている（OAT アグリオ株式会社，2023）。そこで、苗浸漬処理に加用する数種の展着剤について検討した。試験は2022年8月16～19日に、福岡県農林業総合試験場の

Effects of Different Treatment Methods of Dipping Strawberry Plants in Formulation Oil to Control Effectiveness and Workability of *Tetranychus urticae* Koch. By Harui ITAMI, Kanako UEMURA and Nobutaka SHIMIZU

（キーワード：イチゴ、ナミハダニ、浸漬処理、気門封鎖剤、展着剤）